

實相寺花園會報 第206号

令和8年6月1日発行 発行所 臨濟宗妙心寺派 實相寺・實相寺花園會
〒761-0450 高松市三谷町1811番地1 TEL087-889-3838 編集発行人 山本 文匡 <https://www.jissouji.net>

台風6号の被害報告

1日に4月にご住職が亡くなったお寺の檀家さんが亡くなり、たまたま2日が友引で法類寺院の皆さんもそれぞれ県外への出向があった為、小納に葬儀の依頼があり、会報の発行が遅くなりました。(ちなみに先月は2日には袋詰め出来ていましたが、連休で発送が7日になりました)

台風6号は3日の葬儀の為に準備に追われているところにやって来ました。2日の夜9時頃から本堂正面引き戸の敷居の上下からの浸水、天井から「ポタッポタッ」と音がして雨漏りが始まりました。取り敢えず本堂東側の畳は全て取り外し(雨が敷居の下から畳に浸みる為)、雨漏りが激しいところの畳もそれぞれ上げて移動させ、バケツや洗面器を配置しました。



その後も風雨は強まり、2日から3日に日付が変わる頃が最も激しかったように思います。平成27年7月の台風11号でも同様の被害が出ましたので、9年ぶりの大ごととなりました。



實相寺は日山の北西側中腹に位置していて、本堂は北東を向いています。台風が四国の南側を東に進む時、風は日山を回り込んで本堂の正面から吹きつけます。本堂前には風を遮る物が無く、駐車場よりも2m程高い地面に建っている為、風雨は縁や軒下から吹き上がってきます。これはもう避けることが出来ない立地構造上リスクです。

3日午後にはJA共済の担当者に現況を確認して貰いました。四国は梅雨入りしたそうですから、お天気を見ながらしっかり乾かしたいと思います。

「小水（しょうすい）の魚（うお）に
楽しみ有り」⑥

「毘盧遮那仏（びるしゃなぶつ）を超
えてゆけ」

禅書『碧巖録(へきがんろく)』の第
九十九則に「肅宗十身調御（しゅくそ
うじっしんちょうご）」という問答が
あります。肅宗とは8世紀の唐の皇帝
で、有名な玄宗（げんそう、前半生は
善政で知られたが、晩年は楊貴妃を愛
し国が乱れた）の息子です。皇太子の
頃から慧忠国師（えちゅうこくし）に
ついて仏教を学び帰依しました。この
肅宗皇帝がある日、慧忠国師に「十身
調御とはどういうことですか？」と質
問しました。

「十身」とは『華嚴経』に説かれる
仏の十種の身体のことですが、一つで
はなく複数の「十身」が説かれていま
すので、「三身」をさらに細かく分析
したのが「十身」です。

「調御」とは「調えおさめる」とい
う意味で、お釈迦様を「調御丈夫」と
いうように、心を調え悟った状態のこ
とです。ですから肅宗皇帝の問いは、
「心身を調べて悟ったとはどういう状
態ですか？」と尋ねたのです。肅宗皇
帝はそれまで長年、仏教を学んできま
した。「そろそろ悟りたい」という思
いがあったのかも知れません。

すると慧忠国師は「檀越よ、毘盧頂
上を踏んでいけ」と仰いました。以前

紹介した通り、毘盧遮那仏とは法身で
あり、普遍的、宇宙的生命の象徴で
す。最も尊い仏である毘盧遮那仏の頭
を踏んで行けとは、一体どういう意味
か皇帝には理解出来ません。そこで素
直に「私には判りません」と言うと、
国師は「自己清浄法身を認むるなかれ
（自分が尊いなどとは思ふなよ）」と
仰られた、という唐時代の問答です。
それに宋代の圓悟禅師が評唱を加えら
れたのが『碧巖録』であります。山
田無文老師の解説を引用します。

「仏性というものは人々が生まれな
がらにして持つておる。一人ひとりが
箇々円成、円満具足しておる。そう分
かるならば、十身調御は自分ではない
か。毘盧遮那仏の頭を踏んでも何とも
ない。自分が仏だ。そうとらわれても
いかん。仏を尊いととらわれてもいか
ん、我が心が仏だととらわれてもいか
ん。仏臭いものを一切払い捨てよ。こ
う忠国師は示しておられるのである」

要は、禅では絶対的な存在、尊い存
在を自分の外に求めてはいけないので
すが、それを自分の中に固定的に見出
すこともまた否定します。つまり徹底
的に自分を滅し尽くしてこそその「十身
調御」であり、自分が無いからこそ自
分を超える大いなる存在と繋がるので
あり、何にも依存せず無条件に自立
（安心）することが出来るのです。